

リスク・コミュニケーション

順天堂大学医学部公衆衛生学教室
堀口逸子

なぜリスク問題が注目されるのか

- リスク問題の増大(あるいは顕在化)
- リスクの変化
→科学の不確実性の増大(あるいは不信)
- 人々の意識の変化
知る権利の尊重、情報を得た上での選択
- 企業不祥事の頻発

リスク

- 被害の重大性×被害の生起確率
(Hazard)
- 生起確率がわからない: uncertainty
- どちらもわからない: ignorance

リスク・コミュニケーションとは

- 歴史の新しいことば (長く見ても20年)
- リスクを伝えるコミュニケーション技術については、社会心理学の従来技術が利用可能
- 新しいことばを必要とするのは、新しい「考え方」の浸透を目指すから

簡単な歴史

- 用語としての初出は (おそらく) 1984年
 - 最初の研究プロジェクトが1983年
 - ‘Informing people about risk’ というタイトルの論文が1980年に存在
 - 1995年に「20年の私的な歴史をふり返る」という論文が存在
- リスク・コミュニケーションについての初めての会議はアメリカで1986年
- ヨーロッパでの初めての会議は1988年
- 定義らしい定義は1986年、「決定版」は1989年

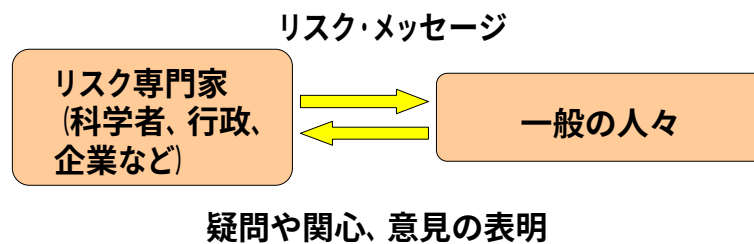
リスク・コミュニケーションの定義

リスクについての、個人、機関、集団間での情報や
意見のやりとりの相互作用的過程

(National Research Council, 1989)

cf. リスク・メッセージ: 送り手から受け手へ
の一方的な情報伝達

リスクコミュニケーションの過程



個人的選択と社会的論争

- 個人的選択 (personal choice)
リスク回避をするかどうかは最終的には個人の判断にゆだねられている
- 社会的論争 (public debate)
公的なルートを通じてリスク回避をはからねばならない (話し合いなど)、一人では決められない

リスク・コミュニケーションの領域

個人的選択

- 消費生活用製品
- 健康・医療問題
- 災害（自然災害、科学技術の事故）

社会的論争

- 高度な科学技術（原子力、遺伝子組み換えなど）
- 環境問題

リスクコミュニケーションの送り手の4つの義務

- **実用的義務**
危険に直面している人々が、その被害を避けることができるように情報を与えなければならない。
- **道徳的義務**
人々が選択を行うことができるように、情報に対しての権利を持っていることを保障するもの。
- **心理的義務**
人々は情報を求めていることを前提としたもの。
- **制度的義務（政府に課される）**
人々は、政府がリスクを効果的かつ効率的な方法で規制することを期待しており、この責任が政府によって適正に果たされているという情報が伝達される。

リスク・コミュニケーションの問題

- 送り手に4つの義務を果たす意思がない
- 送り手に4つの義務を果たす意思があるが、それを実現する技術的問題がある
→心理学の知見が役立つ

心理学の貢献

- リスク認知
- リスクにかかわる意思決定
- コミュニケーションの技術
- 合意形成の技術
- マスコミュニケーション研究、 など

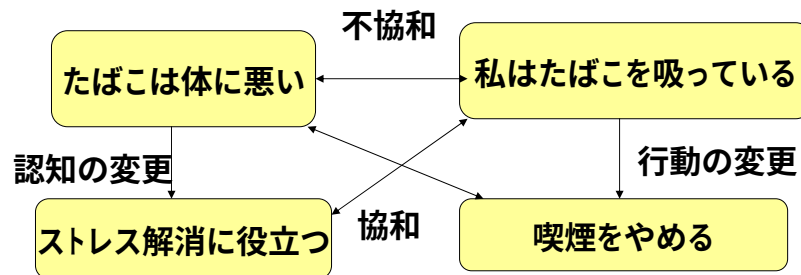
リスク認知研究の結果から

- 小さいリスクを過大評価、大きいリスクを過小評価
- 個人的なリスクについては過小評価
 - 危険なことは私には起こらない(非現実的楽観主義)

認知的不協和理論

- 「酸っぱいブドウ」の理論
- 人は、自分の考えに整合性(協和的關係)を求めようとする
- 行動をかえれば考えが変わる

認知的不協和理論



合理的な判断ができないこと

- 記憶に残っていることが思い出されやすい (可用性ヒューリスティック)
例: 最近報道された
大きな事故があった
- 表現の仕方で選択が変わる (フレーミング)
選択例: 生存率 > 死亡率

コミュニケーションの代表的な技術： 恐怖喚起コミュニケーション

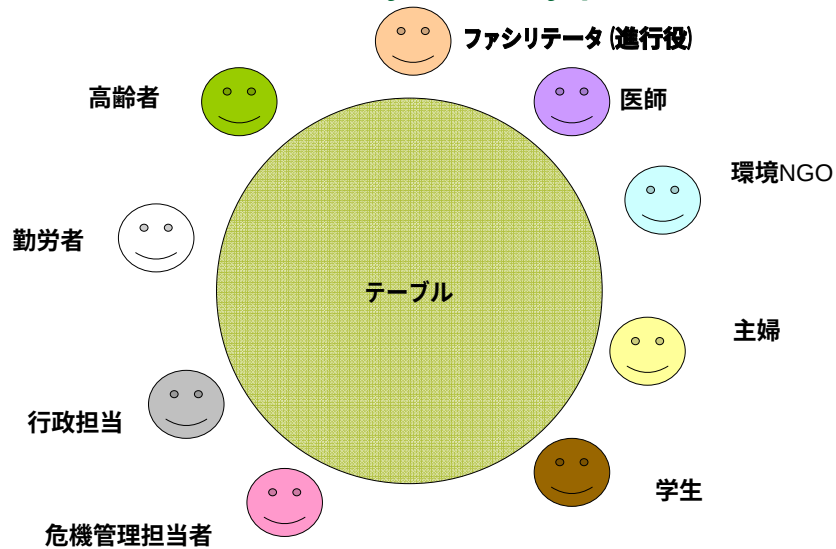
- 恐怖を引き起こして、対処行動をとらせようとする

強恐怖喚起>弱恐怖喚起
(とくに、対処方法を持ちうる人)

合意形成の技術：手続き公正

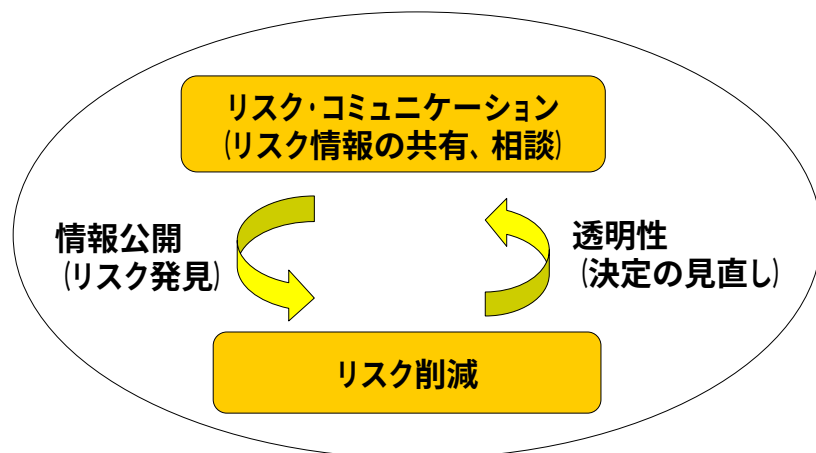
- 発言の機会 (voice) があると公正感が高まる
過程コントロール>決定コントロール
- 住民参加に対する理論的な支援
 - 実行率： 講義形式<集団討議形式

地域対話 (community advisory panel)のイメージ



リスク情報を共有することの意義

社会全体でのリスク管理



最近の議論

- 合意形成技術のあり方
- 特別な配慮があるべき人に対してどうするか
- ハザードの大きいリスクについてどうするか
- 社会的な公正をどうとっていくか (リスク/ベネフィットの不公平な配分)
- 初期の警告の見落としに対する反省 (予防的な施策に対する関心のたかまり)
- 危機管理とリスク管理の融合 (クライシス・コミュニケーションがリスク・コミュニケーションに含まれるようになってきた)

リスク管理に対する考え方の変化

